

96.3.15
視聴覚センター

視聴覚・授業レポート

「改善案」に見られる形は確かにひとつの示唆を与える。だが、一方において教育とは、人間によって行われるものである。どんな素晴らしい性能をもつ機械でも、それを使いこなす人の手にかからなければ効果をあげることはできない。また機械に何を行わせるか、それを開発するのも人間なのである。この際視聴覚関係機器に限って言えば、その人間というのは教員と学生であり、開発の現場とは教室である。

専任、非常勤の別なく、教育熱心な教師とそれに応える学生が、視聴覚機器や施設の十全な発達をうながすのだということを忘れていただきたい。この「教務的側面」を制度的にしっかりと保証していくことが、明治大学における視聴覚教育発展の鍵だと思う。

その昔一部の好事家によるLL授業といった形で始まったAV機器の利用は、ビデオ、衛星放送の発達と相俟って、放送録画、自主教材の作成、授業の録画、そしてパソコン、インターネットとの結合、といった具合に領域を拡大し、いまは語学に限らずあらゆる分野において利用され

ようになった。生田においてこうした飛躍的發展をうながしたのは、中央校舎の完成であるが、いまひとつ、生田教務課の発足という、事務機構の改善があったことを忘れてはならない。従来学部別にばらばらに行われてきた施設管理が一本化され、専任の職員、実験助手補による準備室が稼動しはじめたことである。

視聴覚教育運営委員会が数年来重ねて要望してきた事務局の独立と「センター化」（現在の「センター」という名称は仮称にすぎない）とは、駿河台、和泉、生田3地区の多年にわたる貴重な経験を踏まえて、教師と事務職が一体となり、質の高い研究教育のためのサービスを追求するための、一つの「機構改善案」なのである。生田の視聴覚教育の将来のためにも、制度的にはこの方向がもっとも望ましいと、私は考えている。

その上で、すでに独立を達成している国際交流センター、情報科学センターのもつ「授業対応」の側面とも密に連携し、必要なら一本化することも考えていくべきであろう。

（視聴覚教育運営委員：農学部 フランス語）

「センタからの解放」という豊かな時代へ

中 所 武 司

「視聴覚センタに行って勉強しよう」という真面目な学生にだけすばらしい施設を提供する戦後50年の豊かな社会にも、

「面白いテレビ番組がないから英語のビデオでも見るか」という不真面目な学生の下宿先にそのビデオを届けてくれる大学があったら、私の英語ももう少し良かっただろうに、という夢のような話が夢でなくなるというから世の中は面白い。

そこで、「視聴覚センタ」という教育の場にふさわしい名前が学生の意識から消える日は近い、という話をしましょう。いわゆる高度情報化社会とかいう有難い話に少しの間つきあってください。

情報化と言えば、なんとといってもマルチメディアとインターネットははずせませんね。2010年にはマルチメディア市場は123兆円産業になるといわれています。日本中のデパートの1年間の売り上げが9兆円足らずですから、マルチメディア市場の大きさははかりきれません。今から14年後といえば、今の学生がちょうど課長になって社会の最前線ががんばっているころですが、ビジネスチャンスは数知

れず、多くの人達が何らかの形でマルチメディアに関係していることでしょう。

この話題は、情報スーパーハイウェイと呼ばれる米国の全米情報基盤構想に始まり、国内では新社会資本の充実や全国の家庭までの光ファイバー網の整備という計画と呼応し、ナポリサミットでの地球規模の情報基盤整備の提案とその実現計画へと発展してきました。そして、最近のインターネットの話題へとつながってきたわけです。近い将来には、ホームページを持たないホームレスの存在が社会問題化するかもしれませんね。

このマルチメディアという言葉は、世の中ではいろいろな観点から取り上げられていますが、そのいくつかをあげて見ましょう。一つは、文字、画像、音声、動画などのあらゆる形態の情報がデジタル化されてCD-ROMに記録され、コンピュータで自由に処理できるというものです。二つ目は、そのデジタル化された情報を大量かつ高速に送信するためのインフラとしての光ファイバー網の整備が急がれるというものです。三つ目は、双方向性あるいは放送と通信の融合という観点で、たとえばビデオオンデマン

ドのようなものが注目されています。さらに、遠隔医療やバーチャルモールなど、社会性の強い分野への応用もいろいろ考えられています。

ところが、先の123兆円の話では、生産者中心の視点からインフラの議論が先行していて、利用者の視点に立った魅力的な応用がまだ十分検討されていないのが現状です。マルチメディア時代には、なによりも生産者中心の視点から利用者中心の視点へのパラダイムシフトが必要ですね。

そこで、私は、情報化の目標を、コンピュータ支援による豊かな生活の実現という意味で、CS-life (Computer-Supported Life) と呼んでいます。仕事の効率化よりも生活を豊かにすることにもっと知恵を絞ってはどうか、という気持ちをこめているわけです。

というわけで、日頃、ゼミの学生に「エンドユーザの視点で考えよ」と言っている手前、視聴覚センタについてもそのように考えて見たのが冒頭の夢だったというわけです。これからの時代、センタの果たす役割はますます重要になると思いますが、エンドユーザにはセンタの存在すら知られないで、しかも豊富なビデオ教材などが学生の自宅や下宿のパソコンからいつでも好きなときにアクセスできるというわけです。学生は缶ビールを飲みながらパソコンの画面をマウスでクリックして遊んでいるつもりが、いつのまにか英会話の達人になっているなんて、これこそ来るべき時代の豊かさではないでしょうか。この時代、まさにセンタは縁の下の力持ち、いや仮想なんとか……

(理工学部 システムプログラム)

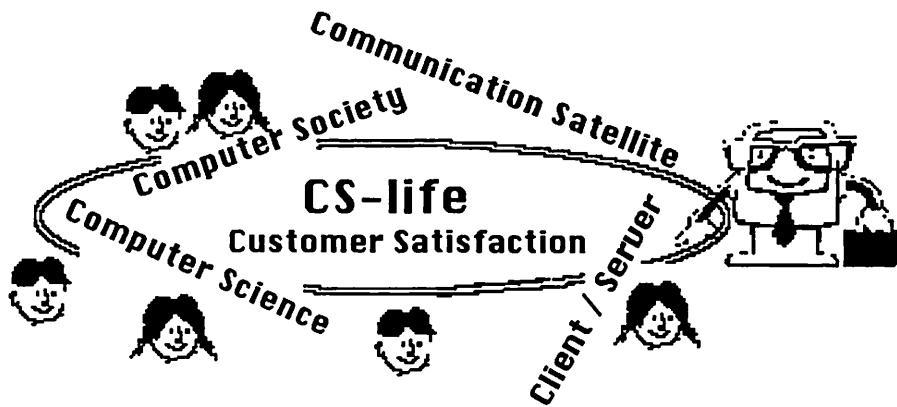


図. マルチメディア時代の CS-life

“Kommunikativer Unterricht”のすすめ

遠山 義孝

日本独文学会の春季研究発表会が来る5月に明大で開催される。その際シンポジウム「教養部解体とドイツ語教育担当者の諸問題」が予定されている。これはドイツ語教師のあり方も変わり目なので何か考えた方がいいのではないかとということで理事会が企画したものである。1991年の大学の設置基準の大綱化以来、国立大の教養部改組（実質廃止）が相次ぎ、現在東大教養学部を除き全国の国立大学から教養部が姿を消した。私大でも立教を始めいくつかの大学で改組、新学部への移行があったが、明大のように学部縦割りの大学はそのまま残り、カリキュラム改革にとどま

ったところが多い。独文理事会への報告によると、1年生では1週2コマが1コマに減り、2年からドイツ語が自由選択か廃止になった大学が相次いでいる。現在のドイツ語が置かれている状況はまさに危機的といえよう。理工学部の場合、昨年から実施の新カリキュラムでは、ドイツ語は旧カリ同様6単位のままでコマ数の減少はなかった。旧カリでは1年に2コマ（I a = 文法、I b = 講読）2年に1コマ（II）が配置されていたのである。新カリでは理工が Semester 制になった関係でドイツ語もこれに連動して細分化され、1年：I a, I b / II a, II b 2年：III / IVと